

教育福祉常任委員会議記録

1. 期 日 令和4年9月5日(月) 開会 13時30分
閉会 15時42分
2. 場 所 議事堂(議場)
3. 付議事件 小中一貫教育校設置計画の見直しを求める陳情
(令和4年陳情第10号)
4. 出席者 根岸委員長、羽根副委員長、小笠原委員、前田委員、一石委員
善波議長

執行者側 教育長、教育部長、教育総務課長、指導班長
傍聴議員 7名
5. 経 過

小中一貫教育校設置計画の見直しを求める陳情(令和4年陳情第10号)

委員長 初日の本会議で付託された案件について審査する。小中一貫教育校設置計画の見直しを求める陳情令和4年陳情第10号を議題とする。
本陳情について議会基本条例第15条の規定により陳情者の意見を聞くが異議ないか。

(「異議なし」との声あり)

委員長 ご異議なしと認める。本陳情は二宮の学校統廃合を考える会の代表石川様より提出されており、本日はご本人に出席いただいている。趣旨説明等は事前にお配りをしているので、ただちに質疑に移らせていただく。

<陳情者に対する質疑>

前田 保護者や地域に対して直接説明をするべきということに関しては同じ考えだが、次の項目について質問させていただく。まず陳情趣旨について質問する。陳情趣旨にある、「小中一貫教育校設置に関しては、教育的な理由が不明確な印象を禁じ得ず、またこれらを担う先生方の多忙化がさらに進むことが心配です」とあるが、教育的な理由が明確になり先生方の多忙化が進まなければ、陳情は取り下げるということでよいか。2問目、「少人数指導や小規模校の良さを活かした教育こそが求められます。」とあるが1学級何名、全体で何学級とされ、どのような教育を望まれているのか。3問目、少人数学級ということであると教員数、教室数を相当数増やさないと出来ないと思う。教室や教員をどのように確保されるつもりか。4問目、海外などで小規模校を数多く設置している国では、教員が足りずに教員資格を持っていない方を数多く臨時採用して、

子どもたちの授業指導に当たらせている国も多くある。日本でも現在小中学校の教員数の不足が取り上げられている。教員資格を持っていない方々にも児童・生徒の教育を任せるということでよろしいか。まず4問について願います。

石川様

今、前田委員さんから4点ほど質問があったので、不十分かも分からないが答えさせていただく。まず1点目の教育的理由が不明確だという点について。どんな点で不明確か、あるいは先生方の多忙化がさらに進むのではないかということについてですが、町の方から出されている小中一貫教育校の冊子を読ませていただいた。その中で今のこの時代からあるいは人口ビジョン、少子高齢化という中で公共施設の適正配置という観点から、施設の35%を削っていかなければいけないということが出ていた。今の学校を取り巻く行政に関しては私たちが学校で教わってきた環境と全く違って、複雑で難しいと思う。ですから、それに対応するような学校のシステムにしなければいけないというのはよく分かる。ただあそこに出ているものに関しては、現在の学校教育の中で手厚くやっていけば十分に出来るのではないかと感じていることが1点ある。それから人口ビジョンの少子高齢化という問題に関しては、小中一貫という中で解決方法ではなく、少人数学級というのがそれこそいいチャンスではないかと思う。十分少人数学級を作っていく条件が、児童数の減少によって作られてきているということから、小中一貫教育校での取り組みよりもむしろ、少人数学級での丁寧な取り組みの方がいいのではないかという風に考えているわけです。そして、先生方の多忙化ということと言うと、小中一貫教育になると乗り入れ授業だとか、今までのそれぞれ5校体制のシステムの中と違った多忙化が出てくるであろうと思う。そうではなくても新しく英語教育が入りICT教育、GIGAスクール、1人ずつ端末を持っていくというような、今までにないような課題も入ってきている。その中で先生方が多忙化をきたしていくのではないかという風な懸念がある。それから2点目の小規模校や少人数学級の良さを活かしたどのような教育をとというようなご質問だったと思うが、最初のご質問の中で多少触れたが、2年ほど前に40年ぶりに定数、学級の児童数、これが40人から35人になった。これは本当にいい英断をなされたと思う。でも本当だったらもう10年前、あるいはもっと前にそういう風な計画があったわけで、現在35人学級が小1から中3までなっていますが、本当でしたらさらに小1では30人学級になっているはずなんです。遅きに失したということと捉えている。でもそれはやっていただいたのでとても良かった。その様な中でやはり今こそ複雑な社会、色々な課題がある中で、子どもたちも色々な課題を抱えているので、一人一人取り残さない、一人一人を丁寧に見てあげなければいけないのではないかと思う。一人一人を丁寧に見るという意味では小中一貫でもそれはやるけれども、物理的に1クラスの人数が少ない方が先生方は一人一人を見てあげられるということは、誰が見てもよく分かるのでこのように考えている。特に小学校1・2年、低学年への指導教育、それから小学校6年生と中学校1年生、よく中1ギャップの問題が言われていますけれども、そここそ丁寧に見てあげることが出来る。小学校6年生が中学校に行っ

てから色々困難なことにぶつかっていく。今まで教科担任制がなかったのに教科担任制になったり、あるいは部活動が入ったり様々な変化がある。中間テスト、期末テスト、アチーブメントテストがある。そういった中で今までと違った変化があるのでそこを丁寧にやっていくことによって、中1ギャップの様な問題も解決の見通しが出てくるのではないかと思っている。3点目の少人数学級の教室の確保です。これは私も良く分かりませんが、なんとか空き教室を利用し教育予算というものもありますから、なかなか思うようにいかないとは思いますが、なんとかやって欲しいと思っている。4番目の外国の方でも100人以下の学校とかで教員が不足している。その様な中で資格を持っていない人も教えるということで、日本の中学校でも国語専科の先生でも他の教科を持たされたりなどがありますが、これは根本的には町とか県の問題というよりも国の定数改善、これをやっていかなければある意味どうしようもない。私たちは先生を増やして欲しいと願いはしているけれども、逆に国の教育政策としては減らされていっている。これはおかしいことなので、町議会でも県でも私たち町民でも、そこは国に要望していくということが大事なことはないだろうかと思っている。

前田

今答えてもらったのだが4問目はまだしも、1から3問目については答えてもらいたかった内容と食い違っていたと思う。答えが出てない。そこで改めてもう一度聞くが、1問目の陳情書に書かれている、心配されている点が解消されれば陳情は取り下げるのかという点の答えがなかったと思う。また2問目では1学級何名、全体で何学級が望ましいのかという答えもなかった。またアチーブメントテストはもう何年も前から行われていません。そういった所をもう一度答えて欲しいのと合わせて、問題点2の記載内容について聞く。問題点2の施設一体型小中一貫教育校に対する教育的な理由については、後程教育委員会の方に質問させていただく。次に「文科省のいうところの12~18クラスさえ超えることとなります。」と記載されていますが、これは学校教育施行規則第41条に記載されている小中学校とも、「12学級以上18学級以下を標準とする」というところだと思う。そこには適正規模とは記載されていない。どこから適正規模が12~18学級とされたのか。学級数の適正規模は各自治体の状況、必要に応じて弾力的に決めて良いことになっていると思うので、答えていただきたい。標準学級数にこだわるのであれば、山西小学校は各学年2学級の12学級で標準通りになっている。内容を見ても3年生6年生は30名と31名で編成されているが、1年生は23名で2学級を始めとして、2年生4年生5年生は1学級20名代の少人数で編成されている。また二宮小学校は19学級と標準を超えている。逆に一色小学校は6学級と標準に対し半分の学級数しかなく大きく標準を下回り、中学校を見ていくと二宮中学校は10学級、二宮西中学校は8学級といずれも標準を下回り、特に二宮西中学校は標準数の12学級の3分の2の学級数しかない。また令和5年度には7学級になり、今後さらに少なく6学級になってしまう。これについてはどのようにお考えか。次の質問です。現在の小学校3校中学校2校を統合すると、それぞれ何学級になるか分かるなら答えていただきたい。次の質問に移る。この問題点に

書いてある福祉の分野についてですが、「第 2 層の協議体が小学校区を中心に作られて、それぞれの活動が進められています。」と記載されていますが、これは旧何々小学校区とすれば問題ないと思いますし、現在でも梅沢地区は二宮小学校区だが、この協議体では山西小学校に属している。これについてはどうお考えか。防災の分野についてですが、学校がなくなっても施設がそのまま残っていれば、地域独自で地域住民が協力することにより、地域の力で広域避難場所として学校施設をそのまま使用することは可能であり、学校があった時以上に地域コミュニティの場所として、地域住民は学校施設を平日の昼間から自由に活用することが出来る。そうは思いませんか。いかがか。問題点にある「コミュニティ・スクールを発展させるという観点からも、現在の学校配置を大切にすべき」ということですが、コミュニティ・スクールをより素晴らしいものに発展させていくためには、1校の方が二宮町の全ての児童・生徒に同じ条件のもと、同じ内容でより良いコミュニティ・スクールに発展させていくことが出来、児童・生徒にとってより有意義な効果的なものになると思う。いかがか。最後の質問です。現在のコミュニティ・スクールは5校とも地域の方々の協力、多大なるご尽力のもとにスムーズに運営されていると思いますが、5校とも内容が異なっていると思う。そこで山西小学校のコミュニティ・スクールはどのような観点のもと、どのような活動をされているのか、登下校時の見守り以外の内容をお聞かせいただきたい。

石川様

最初の質問で抜けていた点ですが、まず小中一貫教育で不明確な点が無くなれば、少人数学級の方を取り下げるのかというご質問だったと思うが、そういう風な見方ではなくて、小中一貫教育も今の教育を取り巻く環境の中では1つの手立てだとは思ふ。ただ少人数学級での取り組みももう一方であり、この方がより一人一人の子どもにとってしっかりと見てあげる手立てが出来るのではないかとということで取り下げない。要するに少人数学級を望んでいる。最初の質問で抜けていた児童・生徒が何人かということですが、例えば今 35 人学級が実施されつつある。私たちが望んでいるのは 30 人以下学級を望んでいる。OECD の各学校と比べていくと 30 人以下学級でもまだまだ多いと思う。例えば小学校でいうと、OECD の中に入っている国では 21 人が平均である。中学校の方では 23.2 人ということで、もちろん急にはそこまではいかないにしても、30 人以下学級になれば 1 クラスが 20 人代になるから、かなり手厚いより温かい教育が出来るだろうと思う。それから新たな質問で、適正規模の質問だったと思うんですが、色々な文章、文科省や中央教育審議会から出されているものを見ると、適正規模というのは 12~18 と出ている。それが本当に適正規模かどうかというのは一概には検証されていないと思う。ですからそれぞれの自治体で実情に応じて色々な学級数が可能だと思う。ここには適正規模 12~18 と書いたけれども、それは一般的に言われていることで、私たちは柔軟な学級数の対応を考えている。

委員長

石川様、標準であると書いてあるのであって、適正規模とは書いてないけれどもという質問だったんですが、適正規模だと考えるということ

か。

前田

学級数は施行規則として第 41 条に記載されているが、そこに適正規模とはどこにも書いてない。そこで施行規則のどこに適正規模という記載があるのか。私が調べた限りでは適正規模とはどこにも載っていない。標準学級数としては記載されておりますが、学級数の適正規模は各自治体の実情、状況に応じて決めてよいという弾力的になっているとは記載されている。しかしどこにも適正規模は小中学校とも 12～18 とは記載されてない。そこで、どこに 12～18 が適正規模として記載されてあるのかということをお聞かせいただきたい。

石川様

私もいくつか文科省や国の方から出されている文章を見ましたけれども、適正規模というような文言があったような気がするけれども、その辺は不確かであるかもしれない。ただ標準学級 12 から 18 という扱いは前田委員さんが言われるように、私たちもそれぞれの自治体の実情に応じた、

前田

すいません。質問の繰り返しになりますが、文科省、国が出している文章には全て標準学級数と記載されている。適正規模に関する記載はどこを見ても各自治体の状況、実情に応じて、と言いますのも例えば離れ小島の学校だとか山の入会地の学校だとか色々な地域によって、自治体によっても実情が異なっている。そこで適正規模につきましては各自治体の状況、実情に応じて弾力的に学級数を定めて良いという記載がなされている。そこで私が色々調べた中で、適正規模が 12～18 だとはどこにも記載がなかった。ただ標準学級数としては 12～18 という記載はそこに記載されている。そこでどこから適正規模が 12～18 と持ってこられたのかをお伺いしたい。

石川様

書面のどこからという根拠については、資料を見直さないとはっきりしない。ただここで言いたいことは標準学級が 12～18 とあったので、先ほど言ったようにそれぞれの自治体での実情に応じた学級編成でいいですよということを、ここでは述べたいと思う。第 2 層の協議体であるが、これは特にコミュニティ・スクール、学校運営協議会が作られた中で、地域の在り方というのは物凄く大事になってくると思う。学校と地域が本当に密な連携を取らなくてはいけないという中で、それぞれの地域が学校に協力するという意味で、連携を進めて欲しいということである。梅沢地区が山西小学校に入っているということで、梅沢地区は二宮小学校区ですが、そういったところはしっかり整備した中で、コミュニティ・スクールを整えていけたらと思う。密な連携に努めていってもらえたらと思っている。

委員長

2 つ目の質問は、少人数と石川様おっしゃっているが、二宮小学校以外はすべてが標準を下回っている。二宮西中学校に関してはもっと低い。そういう現状をどう思われるか、ということである。

石川様

二宮小学校で言いますと、令和4年3年生が35人学級になりました。二宮小学校でいくと3学級、一色小学校だと1学級、山西小学校が2学級という風に小学校の場合はなる。一色小学校の場合35人ですから、令和5年度もこのまま進みますと1学級ですけれども、1人増えれば2学級になっていきます。これが30人学級になれば2学級になっていくというようなことですので、そうすると少人数学級の良さが出てくる。定数の中で出てくるんですが。ですから二宮も学校に関しては確かに35人学級になって恩恵を受けるところは、現在はなかなかない。二宮小学校の方は今までの40人から35人学級になって、恩恵が出てくる部分もあるとは思いますが。ですから今の35人学級では少人数というシステムを十分活かせるという風には、なっていないと思う。それをぜひ町のあるいは県の対応によって30人学級、あるいは早くそれ以下の少人数学級に移行できるような対応をしていただければと思っている。ご質問にあった一色小学校と山西小学校、それから二宮西中学校が施設分離型で一緒になった時は、

前田

その質問はしてません。もう一度質問を言わせてください。小中一貫教育校になったときではなく、現在の小学校3校中学校2校を統合すると、小学校は何学級、中学校は何学級になるかをお分かりならば教えてください。

委員長

前田委員はお分かりになっているんじゃないか。

前田

私は分かっている。私は分かっていますけど、陳情者の方がお分かりなのかどうか。

委員長

教えていただいたうえで、次の質問をしていただいた方が分かりやすいのではないかと思う。どういう意味で質問しているのかも含めてご質問いただけるか。

前田

小中一貫教育校で5校まとめると、相当大きな規模になってしまうということがありましたので、そこで何学級になるのかお分かりならば、私は分かっているが、陳情者の方に伺っているわけです。

委員長

大きな規模になってしまうが良いのですかという質問にさせていただけると、分かりやすいのではないか。

委員長

前田委員はいつも職員にするような質問をされていますが、どういう意味合いで前田委員はこう考えるけれども、それについてどうかという1歩踏み込んだ内容の質問に変えて頂けると、もう少し分かりやすいのではと思う。

前田

3回目はそうさせて頂く。今の残りの質問で、山西小学校のコミュニティ・スクールについてお答えいただきたい。

石川様

資料を今手元に持っていないので詳しく分からないが、1回か2回学校運営協議会が開かれていて、その中で連携する教育について話し合われていたと思っている。ただ単に登下校の問題だけではなく。

前田

先ほど少人数学級の人数が、1学級30名以下でいきたいという答えがあった。現在二宮町では小学校においてまた二宮西中学校において、特に二宮西中学校では全ての学級が30名以下です。小学校においてもほとんどの学級が30名以下となっていて、30名を超える学級は二宮小学校には数多くありますが、山西小学校、一色小学校の2校で31名編成、一色小学校では34名編成の学級が1学級で30名を超えている学級は4学級しかない。現在でも、陳情者の方が1学級30名以下でお願いしたいということに二宮町では該当している。30名をほとんど超えていないということなので、この陳情に関しては二宮ではクリア出てきていると私は考えている。それで小学校・中学校の標準学級数ということであると、小学校は現在のところ今年度で3校統合致しますと33学級、令和5年度では32学級になるのではと予想され、大規模校になってしまい問題が出てくるかと思われる。しかし中学校2校を1つに統合した場合、今年度は1年生で5学級、2年生で6学級、3年生7学級の18学級となってくる。ちょうど標準学級数の上限数となる。間違えました。現在のところ統合しないと18学級ですが、2つを統合すると1年5学級、2年5学級、3年6学級の16学級となりちょうど適した学級数になってくると思う。これが令和5年度になると各学年5学級の15学級、令和6年度は14学級となり標準学級数の中頃を保てるわけです。標準学級数からすると小学校はまだしも、中学校は統合すべきではないかと私は思いますが、これについてはいかがか。次にコミュニティ・スクールの内容についてお伺いしたが、コミュニティ・スクールの内容を見ていきますと二宮小学校、一色小学校と比較して、特に一色小学校が熱心に活動しているのではと思っているが、山西小学校の場合あまりにも違いがある感がする。この小さな町の数少ない児童・生徒には、共通した内容での教育を受けさせるべきだと思っている。その点に関してはいかがお考えか。最後1学級の基準数を超えないための教室の不足、教員の不足を補う費用以外は県・国は面倒をみていただけない。一色小学校、山西小学校では現在でも少人数学級となっている学級が数多くある。それ以上の少人数学級を実現していくためには、町独自の予算を組んでいかなければならないと思う。どこからその費用を捻出されるのか。この費用というのは少人数学級にあてがいます費用は、どこから捻出されるおつもりかお伺いする。

石川様

これからの各年度における学校の人数をあげられて、そのことで二宮の場合は標準の児童・生徒数になるので、特に中学校の場合は統合すべきであるというお話だと思うのですが、統合するという事は施設一体型か分離型かによっても違うと思うのですが、私がここで述べたいと思っている基本は、中学校は各地域にしっかり残し、小学校は3校しっかり地域に残し、その中で各学校を中心とした地域の方々が地域で責任を持って育てていく。そういうことがこれからとても大事なんだろうなと

思う。つまり二宮の場合は、ただ単に今の児童・生徒で統合しても大丈夫という形にはいかないんだろうと思う。統合ではなく各学校を残して頂きたいということです。それから2点目のコミュニティ・スクールで山西小学校を中心とした学校協議体と、一色小学校ではあまりにも違うのではないかということ。一色小学校は本当に様々な活動をされていると私も聞いておりますけれども、ただ比較をして山西小学校がどうのこうのということではなくて、そこは学校がそれぞれ連携するのと同じようにコミュニティ・スクール全体で連携する中で、山西小学校の地域の協議体の中でもそういう良いところをそれぞれ学びながら、山西小学校中心の学校協議体も成長して行って欲しいと思う。要するに連携するということはお互いに良いところを学びあいながら、あるいは助言してもらするなどして、それぞれがより良い協議体になっていくという方向性を持つ必要があると思う。違いは違いとして認めあいながらお互いに尊重して、学校が5つありますから5つの協議体が頑張ってもらいたいと思う。それから3点目の先生が足りないという所で、国は手当てしていただけない、それは人数を減らしているので定数の改善を進めていただきたいわけですが、それが出来ない時には以前二宮でも小学校1・2年生について、町単独で35人学級をやったということで、町の教育予算もこういう財政で厳しいとは思いますが、一度にというわけではないので年度ごとに手当をしていただければと思う。つまり学校は町の財産だと思う。何よりもかけがえのない子どもたちを育てるわけですから、そこに予算をつけられないということは町民としておかしいと思うし、本当にそんな少ないお金でいいんだろうかという所がありますので、学校施設そのもの、そしてそこで働く先生たち、教職員には何より手厚く町議会の中でも教育委員会の中でも対応していけるように、それこそ願いたいと思う。

一石

今お話をお伺いして町の教育委員会の方向性とかけ離れたものではなくて、本当に思いを同じくして二宮の教育を作っていける方々だと思った。先ほど前田委員も言われた通り、二宮の場合は20人学級が多いわけです。そうなると陳情項目の1はほぼ、しばらくは5校存続して教育の中身を研究しているということなので、1について方向性は同じだと思う。施設一体型の小中一貫校を見直すこと、それから施設分離型の小中一貫校の設置について見直すこととありますが、私の理解ではこの小中一貫校がなぜ出てきたかということ、学校の統廃合を施設の側から考えるということに教育委員の方々が大変遺憾を表しまして、子どもたちの教育の立場から考えていくために、この小中一貫教育校というのを選んだということである。新しい風が吹きにくい二宮の教育行政がこれにチャレンジするということを決めたのは、ある意味非常に覚悟がいることだし、実際にその間大変な努力をして教育の授業内容の研究とかをされた。先ほど言われたように、先生方が連携して学びを進めるということをされていると思う。二宮の学校統廃合を考える会の方々がこれを出すにあたって、現場の先生とかにあたって、どのような調査を元にこれを出されたのかということをお聞きしたいと思う。

石川様

一石議員さんの方からは、どのように陳情項目を出してきたのかというようなご質問だったと思うが、まずこの二宮の学校統廃合を考える会は当初は少人数学級を二宮の町で進めていただきたいということで、色々な勉強会を進めていた。その中には一般の町の方、それから元学校の先生の方とか色々いたけれども、少人数学級を進めるということはある意味誰もが望んでいることだと思う。国も文科省も望んでいるようですし、中央教育審議会、そちらの皆さんも望んでいる。それから町の議員さんも決して少人数学級は良くないなどと言う人は、おそらくおられないと思っている。町長さんもそうです。ある意味みんなが子どもたちを教育するには教育条件整備、つまり子どもたちにとってより良い条件を作っていくのが大人の役目だと。あるいはそれぞれの行政の役目だということも勉強会の中で知った。それは私たちだけがそう言っても始まらない。保護者の方や町の方がそういう風に望んでそうして欲しい、少人数にして欲しいと声をあげていかなければ、なかなかそういうものは動かないということで署名活動などもした。署名活動をして一昨年村田町長と教育長に提出した所です。そういう中で町の方から小中一貫教育を進めるというものが出されてきましたので、一体どういうものかということを知りながらみんなで勉強会をした。そして小中一貫教育校設置案が出され、読ましていただいた。なぜ小中一貫教育校を作るかということ、少人数学級を作りたいということと中身は似ていると感じた。ただ小中一貫教育校といいますと、最終的には町に1校しか学校がなくなると。5校残して2つのグループで施設分離型をやろうとかそういう過程はあるにしても、最終の目的は学校を1校にするということである。それだとやはり違うなと思う。町づくりというのは学校があるべきところであって、その周りの子どもたちがその地域の学校に行って、子どもたち同士それから親も含め学んで成長していくというものである。それが自然だし、町づくりにとっても大事なことなんだろうと思う。小中一貫教育校は確かに願っていること、目的にしていることは賛成ではある。だけど結果としてはシステム作りが違ってきってしまうということで、この陳情項目を出しているという経過である。

一石

学校づくりは地域づくりの根幹であるということには賛成であります。例えばこれを進める先生方の多忙化を心配されていますが、会の中に先生のOBなどがいらっしゃるということですが、現場の先生たちの現場からの聞き取りなどはされたのか。

石川様

現場からの聞き取りは行いたいと願っていたんですけども、どこどここの先生から話を聞いたというわけにはいなくて、学校には行けなかった。勉強会の中に出てきている先生も何名かおりましたし、OBの先生もいましたからその方から話を聞いたり、中地区の教職員組合の先生からお話を聞いたりした。

一石

中地区教職員組合の現役の先生から聞き取りをした結果、どんなことがお分かりになったのか。

石川様

小中一貫教育に関しては詳しくは聞いていない。少人数学級の方で主に話を聞いている。少人数学級の場合はコロナ感染症が拡大している時期だったということもありますし、各学校で分散登校ということもあったので、本当に偶然ではあるんですが少人数指導が行われた。今までよりも一人一人の子どもに十分接することが出来、対応が出来たと少人数学級の良さをお話していた。ただ逆に大変ではあったということも話していた。

小笠原

町も最終的には1つの学校になるだろうという所に来てると思うが、早急にやるというわけではない。石川さんは山西小学校の学区にお住まいなのか分からないが、私は一色小学校のエリアに住んでいて子どもがあまりにも少なく、遊ぶために友達を選ぶことも出来ないぐらい少ない。例えば4年生に孫がいますけど、25人中4人は特別級の子で、そうすると21人しかいないということになる。先生の数も少なく回すのが大変という中で、ある意味苦しんでいるという学校が既にある。私は地域の大人のことより子どもの教育が一番大事だと思っている。子どもは育つときに一人で育つんだったら学校に行かせる必要がないわけですから、みんなと関わりながら育つことが重要で、私自身は1学年1クラスしかない山の学校で育っていて1学年1クラスしかないのが嫌だった。選べないということなんです。最終的に今の政府のやり方だったら、絶対に子どもは減っていく。減っていく中で、今の一色小学校みたいな学校がいっぱいになったら、やっぱり一緒になりたいとなるのが自然だと思うがそれについてはいかがか。

石川様

小笠原さんのお話、気持ちはよく分かる。だけども敢えてお話させていただくと、確かに4年生21人ということである意味21人もいるんだという風に私は思う。私は実は元教員で小さな学校で勤めたことがある。そこは全部単級で私はそのころ中学年を持っていたけれども、多くて16~17人だった。少ない所は12人というクラスもあった。それ以前は大きな学校に勤めていた。最初は戸惑いました。教室もガラガラでどうなるんだろうと思いましたが、非常に一人一人良く目をかけてあげられる。学習面でも生活面でも。それと同時に子どもたちは大変仲が良いかった。大きな学校ですとある一定のグループが固まるだけで、全体という遊びもするけれども小さなグループを作成する。小さな学校に行った場合はクラスみんなと一緒に活動したり遊んだりする。それぞれの地域によって違いますが、家庭に戻ってもまた放課後校庭に来て一緒に遊んだりしていた。そんなことを私自身は体験しているので、最初は戸惑いがあったけれども人間関係はかなり良く出来ると信じている。やり方でそうはいかない場合もあるが、もう1つの例として去年、一昨年に少人数学級の勉強会をして、小田原の片浦小学校の方に参観に行かせていただいた。片浦小学校は特認校で少人数学級を進めているということ。ここは全ての学年が15人以上いない。少ない所は13人。多いところで特別に16人。これは今年度の話であるが、13人15人、16人などで1学級。その様子、子どもたちの活動の様子を見てみますと、みんな生き生きしている。金管バンドを1年生から6年生までみんなが行い、高学年生を中

心にして教えあっている。そこに先生はもちろん入るでしょうけれども、高学年の人がリードを取って金管の練習をしていた。またあそこは地域の政府系のホテルがあるけれどもそこと連携して、食育の問題などを地域のそういうところと学校全体が連携して、教室では学べないものを学ぶ。地域というかそこに通わせている保護者は全面的に協力していくというような中で、子どもたちは大変落ち着いていて、1年から6年までの異学年の子どもとの活動に取り組みされていて、私は1日しか見ていなくてそれが全てかと言われたらそうじゃないと思いますが、大変良い学校教育、生活を送っていて人数が少なくても出来ると思っている。それからコミュニティ・スクール、片浦小学校もあるようです。その中で保護者、コミュニティ・スクールの委員、そういう人たちが集まってかなり相談をしあっている。その中でこれは第1回目の協議会ですが、15名以上の定員制、あそこは15名以上になると抽選で15人にする。15名以上になる定員制についての話し合い、学校協議会の中の話し合いで、片浦小学校についてこんな意見も出ているようです。例えばある委員はきめ細かな指導が出来たり、児童同士の関わり合いが深かったり少人数の良さはある。最大のメリットではないか。それからあまり少なすぎても様々な活動が出来なくなる。15名程度が適正ではないか。幼稚園、保育園からみると少人数は魅力的である。保育園を卒園して小学校でのびのび活動している姿を嬉しく見せていただいた。このくらい的人数がとても良いと思う、といった意見が協議体の中で出されているということでした。もちろん少人数学級に賛同しているから行っているわけですがけれども、このような事例もあるので一色小学校は確かに他の学校と比べて少ないですが、それはやりようによっては十分子どもたちは成長出来豊かな学校生活を送っていける条件が、逆にあると思う。

小笠原

もう1点伺います。中学校を1校にという考えに私は賛成です。先ほど石川様が、地域でしっかり責任を持って子どもたちを育てると言いましたけれども、どれだけの人が責任を持って育ててくれるのか。地域の人。今皆共働きで働きに行っていて、現実には百合が丘で夕方子どもたちの見守りといっても、例えば1丁目から立つ人は3人ぐらいが当番で、お通夜やお葬式などがあると出れないし、病院でお祖父さんが具合悪くなったなんていうと2・3人で役割を回している。それは山西小学校でもそうだと思う。地域の見守りというと、保護者で出来ないからせめて地域の見守りをやろうと。私は今朝も山西小学校の人と役場で会ったけれども、すごく熱心に子どもたちの見守りをしている人が、山西小学校はそういう意識を持っている周りのお年寄りとかも少なく、本当に大変だとおっしゃっていた。それが現実である。たまたまちよっと学校に行くと草むしりして、総合の授業を手伝うからといってそれは責任を持って子どもを育てるとは言わないと思う。ちゃんと学校と地域は協力しますが、地域が責任を持ってなんてやりきれない。それについてはいかがか。

石川様

確かに現状はそうなんだろうと思う。私も現場でやっていたときは、確かに昔のように地域が関わるということは本当に減ってきていると

思った。そこはそこで現状認識は同じだと思う。ただそれでいいのかということ。それは少人数学級でというよりも小中一貫教育校にしても同じことだと思う。学校は学校同士で、小中で連携を取りながら子どもたちを育てていく。或いは小学校は小学校で連携しながら育てていく。その間小中一貫教育校を目指すという中で、学校の先生は物凄い時間を使って能力を使って研究を進めていた。あれには頭が下がる。あの分析は素晴らしいなど私も思っている。そういう連携を作っていかなければいけない。今回この様な課題が出てきて、今までもやられているとは思いますが、さらに今回はお互い連携しあってきているんだと思う。それが大事で、つまりここからでもいいから学校も連携し地域のコミュニティ・スクール同士でも連携し、第2協議体それぞれの中でも連携していくことを目指していかなくてはいけないと思う。少人数であろうと小中一貫校であろうと。そうしなければ変わらないし、一番大変なのは子どもが本来地域から或いは学校から得るべきものが得られなくなることで、そこは小笠原議員さんも諦めることなく、それこそ先頭に立って地域づくりに出ていただきたいと思う。昔のようにお母さんは家庭で、或いはお祖父ちゃん、お祖母ちゃんがいてというような中と違ってお父さんもお母さんも働いて、それが今多いですけれども、そんな中でそういう親とのやり取りは得られないという現状がある。ですからそこはしっかりどうしたら良いか話し合っていたいただきたい。

羽根

確認だが本日石川様が訴えている小中一貫教育校の見直しというところだが、見直した方が良い理由が一番出てきたのが少ない学級、30人以下の学級を望むというものが一番メインで出てきたというところと、地域に学校を残すという2つが一番メインに聞こえた。それだけではないと思うが、メインの理由はそこなのかという所をお聞きしたい。

石川様

何を一番言いたいかと言うと、羽根委員さんがおっしゃっていただいた、第1に学校をなくさないでということ。学校を残すと。学校がなくなるわけではないが、5つ学校をそれぞれの地域に残してくださいということ。それぞれ学校の中で新しい課題もたくさんあり、それに対応するためには小中一貫校、特に施設一体型の小中一貫校にするよりも、大規模校になりますから、今の学校の中で課題にきめ細かく対応し、そしてよりきめ細かくするためにはより人数を減らして欲しい。ただ前田委員さんのおっしゃったように、今二宮の場合は何も30人学級を待たなくても1クラスの人数が減っている状況があるので、十分やっていけるということで繰り返しますけど5校は残してください。そして少人数の学級をしてください。さらに言えば連携です。先ほど小笠原委員さんの時に話した通り連携をこれからも取ってください。学校の先生、教職員が忙しくなるということについての対策を取った中で、連携を取って欲しい。コミュニティ・スクールもありますから。そこも地域のお母さん、お父さんが入った中での連携を強めてくださいというのが、今回の陳情の中で言いたいことである。

羽根

5つの学校を残すことについてお聞きしたいが、前田委員がおっしゃ

ってるように少子高齢化も進みますし、限界がどこかで来るのではないかと私は思っていて、地域の方々も高齢化、少子高齢化が進み保護者も少なくなる。私は東京の大きな区で育ったので、このぐらいの小さな町でこれだけ学校があることに正直驚いた。石川さんがおっしゃってるように連携を横でしていく、学校もしていくのであれば、大変さを考えると集約してみんなの力を、小さな町なので集約してみんな、町全体で子どもを支えていく、サポートしていく方がもっと良い形が何か生まれていくと思う。それぞれが一色小学校のこともありますし、どんどんやらなくては、残った人がやらなくてはと疲弊していくことも、私は想像出来るのではないと思うが、そのあたりについてはどのようにお考えか。

石川様

逆にそれぞれの学校が小さくなるから施設一体型の小中一貫校を作ったとする。そうするとどういう事が起こるかということをお考えますと、子どもたちにとっては何か今まであった学校がなくなってしまったと。1つの学校に行く為には二宮町の全員ではないにしても、かなりの児童・生徒が遠くまで行かなければいけない。その中には小学校1年生から6年生、中1から中3まで、上の大きな子はいいけれども小さな小学校1年生は大丈夫でしょうか。あんな大きなランドセル、体よりも大きなランドセルを背負って、たくさん荷物を持って何分かかるのか。今うちの隣の子、山西小学校ですけれども、どのくらいかかるか聞いたら、30分だそうです。その子は3年生。30分だって小学校1年生の子にとってはかなりの時間である。でもうちから山西小学校までは30分ですけれども、もし町の真ん中あたりにすればそれ以上かかる。行きで4、50分、帰りでもまた4、50分。本当にそれ考えてるの、お父さんお母さんって思う。心配で仕方がない。送り迎えするようになるのか、あるいはスクールバスかそれは分かりませんが、つまりそういうことにならざるを得ない。もう1つはこの二宮地域に引っ越したいと思う人にとって、特に若いお父さんお母さん、これから子育てやるっていうお父さんお母さんにとって、二宮町には学校が、大きな立派な学校が1校ある。どう思うでしょうか。行きたいと思いませんか。引っ越したいと思いませんか。今羽根委員さんは、5校は多いなと感じられたようですが、5校ある、それは嬉しいときとなると思う。そういう意味で子どもたちにとっても、親御さんにとっても身近な所に学校があるというのは非常に有難いことで、安心なことだと思う。だからいくら立派な学校が出来ても、果たして有難いのかどうかと。それは良くないのでちゃんと残して欲しいと思っている。

羽根

石川様の考えは分かりました。通学についてはその時々で考えた、バスなのか分からないですけれども、それは支障があれば当然考えると思う。5校あったらもっといいというお話だったと思うんですけど、そういう考え方は様々だと思う。それからもう1つお聞きしたいんですけど、少子高齢化に向かっていく所で地域を支える子どもたちを育てるという考え方。ところが人数が少なくなっていく、支える手が足りなくなっていくという所についてはいかががお考えか。

石川様

少子高齢化になって地域を支える力、マンパワーが少なくなっていくというお話だと思うが、そこは本当に大きな課題だと思う。人口ビジョンを読むと10年、20年後には二宮の町も1万4千5千ぐらいになってしまうという数字が出ていたが、この二宮町で生活している人たちにとっては、その人口の半分ぐらいはマンパワーとして力を出せる方もいる。そういうお父さんお母さん、或いは地域のマンパワーとして体力のある方が町、或いは地域の集まりに出ていけるような環境、地域の環境というのでしょうか、私は行きたくないというのではなく町の為に一肌脱ぐ、そんな環境を作っていく。私の知ってる富士見が丘1丁目は老人というくくりですけれども、日本で一番活動しているということで表彰されたそうです。その老人会の中には数十のグループがあって、ゲートボール、カラオケと数十のものがあって、もちろん見回りもしますけれどもかなり人同士がお付き合い出来る、そのようなことをおっしゃっていた。何か町独自の工夫、老人、高齢者だけではなくて、普段働いている人たちも出られるような工夫があるといいのかと思う。

根岸

石川様のおっしゃっている少人数指導はとても良いと思う。少人数指導、例えば15人ぐらいという人数になるには、二宮はなかなかそこまでは減りきらないということがあると思う。私は小中一貫によって先生のバランスと定数、あと子どもたちのバランスというのが却って良くなっていくのではないかと思っている。理想的な少人数クラスというまではなかなか減りきらない。そんな中で先生はいろいろICT化とか、コロナ禍とか多忙を極めている部分もあり、小中一貫教育校設置になるから先生方の多忙化が進むというよりは、今の中途半端な人数のクラスを維持していくことで、先生の多忙化が進むのではないかと私は思っている。子どもの人数とか、二宮は二宮小学校が一色小学校の4倍ぐらいの人数がいて、どこを見ても中途半端さとアンバランスさがある。石川様は5校の維持だとおっしゃっていますので、質問は将来のこととか人数の点から諮ったうえで考えられているかということをもまず伺います。

石川様

将来のことですけれども小中一貫で研究されているのを見ますと、将来的にはどんどん人数が減るので、敢えて少人数学級にしなくてもいいというようなこともあるのかなとも思う。ただ全ての学校、全ての学級が30人学級になったらその恩恵で、今あるクラスが2つに分かれるとか3つに分かれるとかいうことはないにしても、当然学級の人数が少なくなれば教職員の配置にも影響してくる。例え少人数学級編成じゃなくて小中一貫教育になってもそれはそのまま生きてきますから、ぜひ少人数学級編成というものは進めたいと思っています。

根岸

陳情項目2の計画を見直すこと、或いは分離型小中一貫教育校についても、議決ではなく教育委員会の方で決めている。石川様がお聞きになりたいこと、或いは充実した議論としては教育委員会への陳情、請願される方が私としては望ましいと考えている。ぜひまたもう一度教育委員会の方に陳情を出されてはと思います。いかがか。

石川様

それは今日の陳情説明を経て、また会の方に戻って検討させていただきたいと思う。

休憩 15 時 02 分

再開 15 時 10 分

< 執行者側への参考質疑 >

一石

陳情趣旨の中で、先生方の多忙化が進むことが心配ですとある。実際の聞き取りについては具体的なお話はなかったが、教育委員会としては現場の先生方とやり取りをしながら進めていると思いますので、その辺のことを説明いただけたらと思う。二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会というのを持たれていくわけですが、社会状況が大きく変化する可能性がある中個別最適な様々な提案などを取り入れながら、柔軟に取り組む場として受け止めてもよいか。

教育総務課長

1 点目の教職員の多忙化、これについては一石委員のおっしゃる通りこちらとしてもデリケートな問題といたしますか、大切に扱いたいと思っている。令和 5 年度から分離型が始まるということはお伝えしているところですが、兼ねてから分離型といえば乗り入れ授業というような言い方を教育委員会の方でもしてきた。一方で今年度分離型の準備委員会を管理職の先生方としていく中で、やはりそこへの不安があるということはこちらでも承知をしている。まず前提として今まで積み上げてきた 9 年間を見通したカリキュラム研究、この成果を活かした指導をしていこうという所で、何も乗り入れにこだわらずに交流の方法は他にもあるだろうと思う。そこも探しながら指導をしていこうという所で、今現場とは折り合いをつけている所である。もう 1 つの施設一体型の研究会ですが、これは社会状況の変化に応じて柔軟に対応は変えていくということで、今年 4 月に計画を教育委員会議で議決していただいた時に、教育委員からも計画に縛られることがないようにということは注意を受けているので、そういった対応で行きたいと考えている。

一石

今日の陳情者も子どもたちに寄り添った二宮型を考えたいという思いは一緒だと思う。かねてから若い先生が多くて先生の世代に偏りがあるので、若い先生方の研究の機会としてもこの小中一貫教育が資する場だったということがあったのか。それを教えて欲しい。

指導班長

先ほど課長から説明のあったカリキュラム研究こそが、若手の教員にとっての教材研究であった。特に一色小学校のような単級の学校ではなかなか教材分析というのが難しい所がありますので、色々な先生が集まって多様な学び方を研究出来るカリキュラム研究というのは、非常に先生にとって価値の高い研究の場になっている。

一石

小中一貫校とか二宮学園とかかなり名前が先行してしまっていて、教育委員会が現場の先生方と説明している具体のビジョンというのか、本当のソ

フトの所が町民の方に伝わりにくいんだと今日分かった。かなり現実の状況が町民の方々に伝わっていないという気がした。そうすると分かりやすい説明と対立するような考えではなくて、本当に子どもたちを二宮でしっかり支えて育てたいという思いがつながるような二宮型の教育を作るために、どのような情報共有の工夫が必要だとか、その辺の現在の段階の気付きがありましたら教えて欲しい。

教育総務課長

確かに説明不足は否めないかなと思っている。今年1学期の終わりごろに保護者の方々に、今こういう状況で進んでいますという通知をお出ししたりとかそういったこともして、今後11月号の広報でお知らせしたり、学期に1回以上の頻度で進捗はお知らせしていきたいと思っている所である。例えば学園の名称などもこういった思いで付けたんですとか、先生方と一緒に小中一貫教育の教育目標も決めてきた。これは先生全員にアンケート、9年間でどういった子を育てたいというアンケートを取ったりして決めたことである。そういった所が伝えきれてない、こちらも伝えていないという所も感じた。そういった意味での情報共有、今日陳情者の方がおっしゃったことというのは大部分が同じ、二宮の子どものことを考えていると思っている。それが少人数学級なのか小規模校なのかというノウハウの違いであって、考えている目標は一緒なので、こちらの考えていることをもう少し伝えていく必要があることが今回の気付きである。

羽根

陳情の中に地域の方から直接聞く機会がまだありませんということを書いていただいているのですが、ここについて私も同じように思いますので、通知というのは一方的な通知、報告みたいになってしまうと思う。やはり保護者の方々とか、地域の方々の意見を伺う機会を持つ必要があると思うが、そこら辺りについてはどのようにお考えか。

教育総務課長

おっしゃる通りです。今は一方的に伝えてる感がある。今後分離型を進めつつ、研究会の中では学校の関係者と地域の方と保護者の方、後は有識者の方、こういった構成で行っていますので、そういった場や或いは学校運営協議会の代表者会の中でも、しっかり小中一貫について話し合いたいというお言葉もいただいているので、そういった所での情報共有をまずは進めて、将来的な施設一体型については特に興味関心が高いと思いますので、やはり意見を聞けるような場というのは作っていかねばいけないと感じている。

羽根

そういった会の方とか代表の方の意見を聞くのはもちろんだと思うが、広く町民に町の考え方が変わってきたというか、基本は変わっていないんでしょうけれども動きがあったわけですから、そこを丁寧に説明していく、また意見を聞く機会は絶対に必要だと思うが、そこはやっていただけそうですか。

教育総務課長

手法についてはなお検討と言いますか、今ここでこれをやりますとお伝えするのは難しいが、例えば今回二宮学園という名前を付けて2グル

ープに分けるという前提の前に、一色小学校の子どもが卒業したら本来は緑が丘と一色の子どもは二宮中学校に行くが、二宮西中学校も弾力的に選べるようにするという話を一旦していた。これは一色小学校の方でしっかり保護者の方の意見を聞き取ってくださって、その上でやはりそうではないという判断をしたという経過もある。ですから学校を通じてでも、他にもコミュニティ・スクール、PTA そういった機会を使ってでも出来るだけこちらは情報収集をしていきたいと考えている。

前田

小中一貫教育校設置に関する教育的理由を、分かりやすくご説明いただきたいと思う。

教育長

私は就任して以来ずっと同じことを言っているが、子どもたちが人と触れ合う機会がどんどん減ってきている。その中で1人でも多くの子もたちが他者と触れ合う機会を設けたい、その為に小中一貫教育ということを取り入れた。さらに分かりやすい言葉というご指摘もありましたので、言ってみるのであればつなぐということ、小中一貫教育というのはつなぐというのがやはりキーワードになるかと思う。今課長の方からカリキュラムを一本化したという、小中学校9年間のカリキュラムを一本化したという話もありましたが、まず学習内容をつなぐというのが1つだと思っている。次につなぐのは子どもたち同士である。小学校から中学校までの子どもたちがつながる、異学年の年齢がつながるという所。そしてさらに教職員がつながる、二宮に籍を置く全ての教員がつながって研究を進め、子どもたちを育てていくということ。この3つのつなぐに加えてコミュニティ・スクールの枠組みを使った地域、家庭、学校がつながるとこういった所が小中一貫教育の根底にあると考えている。

休憩 15時22分

(傍聴議員の質疑：大沼議員)

再開 15時37分

<討論>

前田

不採択の立場で討論する。二宮町の子どもたちの教育をより良い方向へというお考えは理解出来るところだが、私の質問に対してや他の委員の質問に対して、残念ながら的確なお答えがいただけなかったのではと思う。小学校3校を残すというのは理解出来ますが、現在の二宮町の学校教育の現状について、よく理解されていないのではという感じがした。特に少人数学級については現在でも二宮小学校、二宮中学校を除きますと、30人学級となっている。今更という感じがする。20人学級を望むということならまだしもだが。そのような感じがした。小中一貫教育校に関しては今この時点ではなしに、以前小中一貫教育校の話が出てまいりました時点でこのような陳情をお出しいただきたかったと思っている。また先ほどお話があった、小田原市片浦地区は人口減となり、片浦中学校は廃校となり、片浦小学校は小田原市全地区から希望をつのり、人数が超えた場合には抽選によって通学できる各学年1学級、少人数の特例

の研究校として運営されているわけである。二宮町の現状の教育に対してはそぐわないのではないかと思う。以上を持ちまして不採択とさせていただきます。

羽根

不採択の立場で討論させていただく。陳情の方がおっしゃっていただいた、継続して保護者や地域に対して説明する機会を持つていくこと、ここについては行政の方をお願いしたいという思いは私もあるのですが、今回の陳情に関して小中一貫教育校設置の見直しをする、なぜしなくてはいけないのかという根拠の所、子どもたちのためにどうしてこうなのかという所の理由が、今一步質問と答えの中で噛み合っていなかった感が否めない。そこの根拠をもうちょっと子どもたちのためにどうなのかという所を、もし考えていただけてたら良かったのかなと思っています。残念ながら今回は不採択の立場ということにさせていただきます。

<採決>

委員長

陳情第 10 号を採決する。陳情第 10 号を採択することに賛成の委員の挙手を求める。

(挙手なし)

委員長

挙手はなしであります。よって陳情第 10 号は不採択と決定する。以上で陳情第 10 号の審査を終了とする。

15 時 42 分